

ディペックス・ジャパン 患者の語りデータベースを 教材として活用した教育事例

射場典子¹・森田夏実^{1,2}・青木昭子^{1,3}

1) 認定NPO法人健康と病いの語りディペックス・ジャパン

2) 東京女子医科大学

3) 東京医科大学八王子医療センター

はじめに

- **～そこには患者にしか語れない言葉がある～**
- 医療を実践する上でEBMとNBMは車の両輪と言われて久しいが、NBM教育の実践についての報告は多くない。病気の苦しさや悩みをもっとも良く知っているのは、患者本人であり、病気をどのように受け止め、どのようにして切り抜けてきたかは、病気を体験した患者にしか語れないことである。患者の体験談は、よりよい医療実践をめざす医学教育には、欠かすことのできない教材となりえる。

目的

- 「健康と病いの語りディペックス・ジャパン」(DIPEX-JAPAN) は、これまでに200人近い患者さんや家族介護者のインタビューを行い、5つのデータベースを作成、ウェブサイトで無料公開してきた。2-3分に編集した体験談は1800以上に上り、そのほとんどは映像・音声で視聴することができ、2009年～全国の医療系大学の授業や医療者の研修等で活用されてきた。今回、2016年度の語りの教育的活用に関する実績を報告する。

健康と病いの語り

認知症の語り
dementia

乳がんの語り
breast cancer

前立腺がんの語り
prostate cancer

大腸がん検診の語り
bowel screening

臨床試験・治験の語り
clinical trial

健康と病いの語り

—— 健康と病いの語りデータベース・DIPEXとは？
患者ひとり1人の病気体験のデータベース

夫が右胸のピンポン玉のようなしこりに気づいたが、まさか20代で乳がんになるとは思わなかった



プロフィール

インタビュー12

約1時間、27歳
インタビュー：2013年（10月10日）

10月10日発行、2013年春、右乳がん。右乳癌も診断が、リンパ節転移、骨転移（メタスタゼ）、肺転移、脳転移を要した。主治医は、病状が進行して、手術を断念し、緩和ケアに切り替えた。その後、転移が進行し、最終的に2014年春に亡くなった。主治医は、病状が進行して、手術を断念し、緩和ケアに切り替えた。その後、転移が進行し、最終的に2014年春に亡くなった。

インタビュー内容テキスト

SNSで共有する



Database of **I**ndividual **P**atient **E**xperience
データベース ひとり1人 患者 体験

データベースの特徴

- ✓ インターネットでいつでも、どこでも見られる
- ✓ 映像、音声、文章で見ることができる
- ✓ 一つの病気で30-50人。多様性がわかる
- ✓ テーマ、年齢、診断名、立場別等で検索可能
- ✓ 1つの体験談が2-3分と視聴しやすい長さ

調査方法

- 語りの教育的活用を申し込んだ者（内訳は図1）に対して対象、科目、活用理由、方法、受講者の反応、有用性、活用しやすさ等に関してメール調査を実施した。
- 2016年度の申込は49件で、1人が複数の授業を担当するケースもあるため、合計57カ所での活用申込があり、このうち23カ所の回答が得られた（回収率40.4%）。

図1：調査対象者（活用申込）の内訳

看護職・介護職の研修
19%

看護系大学・専門学校・高校
41%

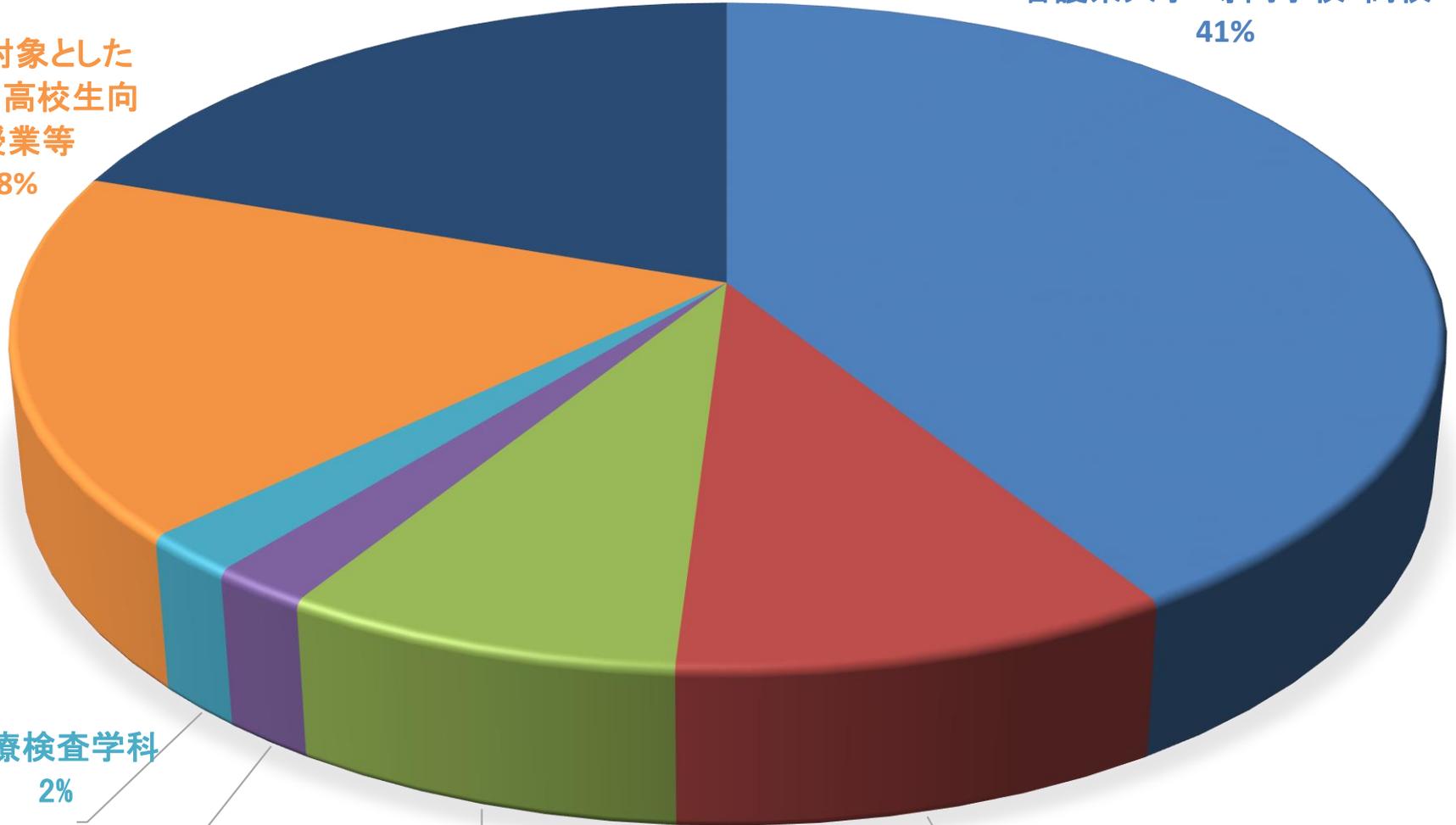
一般を対象とした
講習会、高校生向
け授業等
18%

医療検査学科
2%

理学療法学科
2%

医学部・歯学部
8%

薬学部
10%



結果1

<教育の対象>

- メール調査に回答があった23件の教育事例の詳細を以下に示す。内訳は医療系学生を対象としたものが15件（表1）、看護師等対象が4件、一般向けが4件であった。1回の受講者数は1～299人と幅広く、平均114.8人であった。

<語りを活用した科目と理由>

- 語りを活用した科目は、表2に示した。47.8%が**90分授業**で展開しており、次いで13%が90分×2コマを使っていた。語りを活用した共通の理由は「患者の生の声に触れる機会を提供する」ためであり、科目によって目指すところは異なっていた（表3）。

表1:学生の専攻と学年

対象学生	件数
看護1年	2
看護2年	2
看護3年	2
看護修士1年	1
医学部1年	1
医学部2年	1
医療検査3年	1
理学療法1年	1
薬学部1年	1
薬学部3年	1
薬学部4年	1

表2:語りを使った主な科目

成人看護学	2
慢性期看護学	1
がん看護学	1
看護リテラシー	1
医療プロフェッショナリズム	1
心理学	1
医療社会学	1
医療人類学	1
医療倫理	3
テュートリアル教育	1

表3:患者の語りを教材として使った理由(抜粋)

- ・「病気」としての認知症ではなく、体験としての認知症を理解し、一人の人間として認知症を患う人々をとらえる機会とするため
- ・「患者の語り」も医療情報の一つであることを理解し、他者の思いや意見を聴き、同時に、自分の思いや意見を分かり易く相手に伝えるという学びを深めるため
- ・EBM実践に重要な「患者の意向 (preference)」について知るために、「患者の語り」に触れて、患者の置かれている状況を想像し、患者に共感し、患者の体験を共有するという視点を学ぶため
- ・通常の講義では伝わりにくい、患者さんの気持ちや医療の現場におけるコミュニケーションの重要性を理解し、病院実習や医療者となったときに役立つ医療コミュニケーション能力を身につけるため
- ・学生が自身のもつ認知症への偏見・思い込みに気づき、多様性に関わられた視点を持つようになるため

結果2

<活用された語り>

- 活用した語りの数は1～18と幅広く、平均4つの体験談を教材として見せていた。データベース別の使用頻度（表4）では乳がんが最も多く、患者の気持ちや思いが表されたトピックの使用頻度が高かった（表5）

<活用方法>

語りを視聴後、**60.9%の事例で何らかのグループディスカッションを行っていた**。残りの8.7%はレポートなど個人で振り返る機会を設けていた。講義中の視聴にとどまったのは30.4%であった（表6）。

表4 データベース別の利用総数

乳がん	51
認知症	28
前立腺がん	10
大腸がん検診	2

表5 利用頻度の高いトピック

乳がん	家族の思い・家族への思い	14
乳がん	からだ・心・パートナーとの関係	11
乳がん	診断されたときの気持ち	8
前立腺がん	家族の思い、家族への思い	4
前立腺がん	経済的負担	2
前立腺がん	手術と性機能障害	2
認知症	認知症の非薬物療法	5
認知症	診断されたときの気持ち（本人）	5
認知症	認知症本人の家族への思い	3
大腸がん検診	大腸内視鏡検査の説明と準備	1
大腸がん検診	大腸内視鏡検査の痛み	1

表6 活用方法

視聴後にグループディスカッションを取り入れた	14
視聴前後に講義・説明のみ行った	7
ディスカッションはしなかったが、レポートなど個人の振り返りをした	2

結果3

<受講者の反応>

グループディスカッションを取り入れた事例の受講者の学びについての主な記載は表7に示した。

<教材としての使いやすさと有用性>

- 図2に示した通り、概ね良好な評価を得られた。

表7 受講者の反応の主な記述

学生が視聴前に書いた検査の説明は一般的内容だったが、視聴後は辛さ・不安と覚えることは、患者さん個々で異なることを念頭に、その方がなぜこの検査を受けるのか対象の立場に立って説明の仕方を変えたほうがよいという感想が多く、再度説明内容を書いてもらうと患者さんの気持ちや反応を確認するといった記述が増えた。

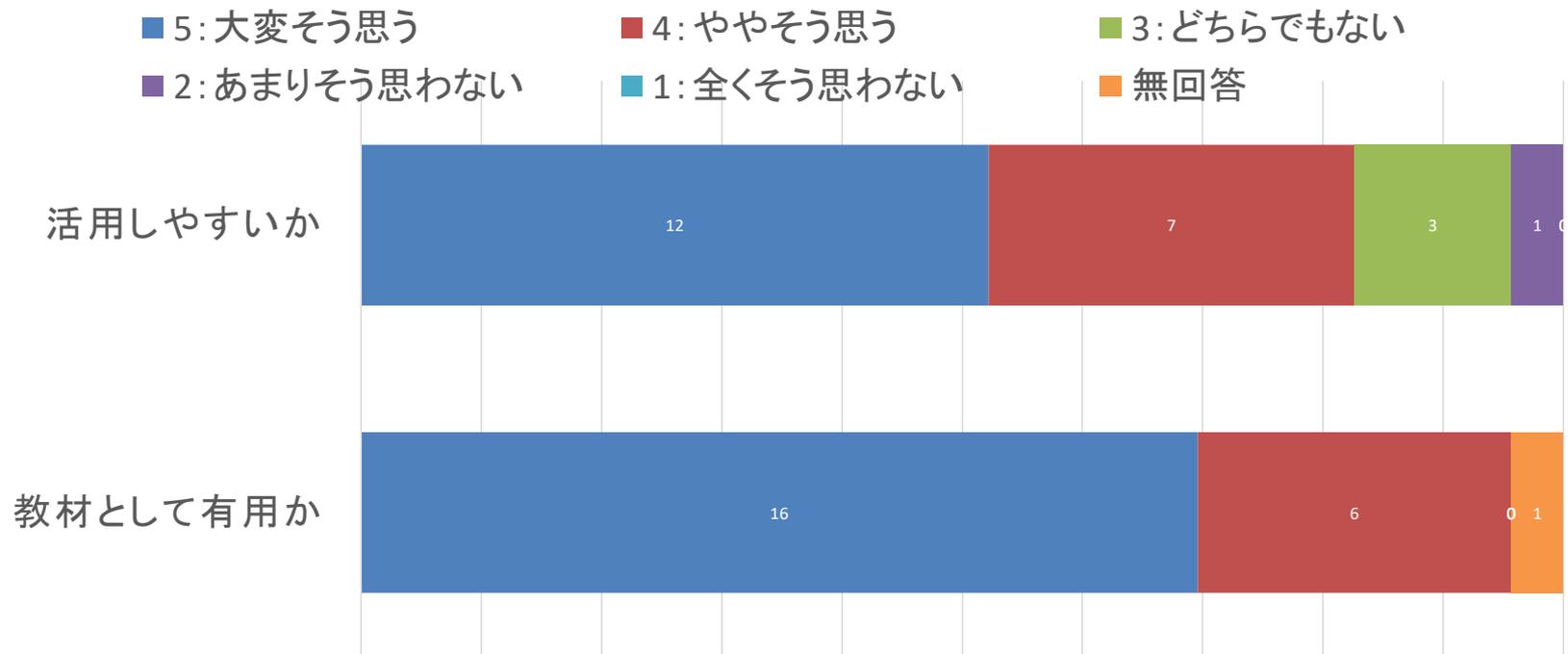
体験談の内容から具体的な困難や葛藤について理解できて、当事者と支援者の立場の違いと見え方の違い、支援の際に注意すべきことについての理解が深まった。

感想の用紙にみられた学生の反応は、①疾患が同じでも体験には多様性があることへの驚き、②医療者と患者の視点のずれの発見、③「患者の話をよく聞く」ことやNBM的実践の重要性への認識の獲得に集約できた。

視聴中は、顔を上げてスクリーンを見つめ、語りに耳を傾けている受講者がほとんどだった。ディスカッション後には、認知症であっても自分の思いを語ることができるという気付きや、その言葉ひとつひとつの意味を汲み取っていく必要性を感じたとの発表があった。

熱心に視聴していた。授業後の感想では、同じ乳がんであっても病の体験は人それぞれ違うこと、そして、その体験の意味を知ることが医療者には求められることがあげられていた。また、語りの内容から、看護師としての自身の姿勢を振り返り、看護師に求められる姿勢を改めて考える機会となったこともあげられていた。

図2 データベースの教材評価



考察・今後への課題

- さまざまな専攻の医療系大学で患者の語りが教材として有用であることがわかった。患者の語りを使う具体的な目的は科目によるが、講義では伝えられない患者の視点を提供することができていた。また、患者の語りは、自分の価値観を見直すことにも役立っていた。多くの事例で、視聴後にグループディスカッションや個人の振り返りを取り入れており、語りを通して得た気づきを一度、言語化し、それを他者と共有して、自分の中で咀嚼する機会が学びを深める上で重要であると考えられた。このような経験の積み重ねが、医療者として相手の状況や気持ちを思い測り、対話できる感性や能力（NARRATIVE COMPETENCY）の育成につながることを期待している。
- 語りを用いるだけでなく、語りを通してどのように学ぶかが重要であり、今後は目的に応じた効果的なプログラムの開発に加え、ファシリテートの視点についても検討していくことが課題である。